

平成29年3月10日（金）

平成28年度学力育成推進事業
「拠点校リーダー養成・活用事業」報告書

島根県立松江北高等学校
教諭 高橋 良子

取りに行く学びに向かう授業をつくろう ～「認め合い」「学び合い」「高め合う」協同学習の実践～

1. 研究テーマ設定の理由

昨年度は自身の教職経験6年目研修にあたり、前任校である松江市立女子高校において、「『認め合い』『学び合い』『高め合う』授業の研究～現代文の授業における『協同学習』の実践を通して～」というテーマに取り組んだ。6年目研修を通して、協同学習の効果やその可能性を再確認するとともに、学習指導という角度からだけでなく、クラス経営・人間育成という視点からも非常に有効な指導法であるということを実感した。

昨年4月に現任校である松江北高校に赴任。今年度、北高校は、「拠点校リーダー事業」に名乗りをあげ、「取りに行く学びに向かう授業づくり」をテーマに研究を行うこととなり、私を含め、3名の教員が拠点校リーダーとして任命された。

前任校の女子高校とは、学校の特性や進学スタイル等が大きく異なる北高校ではあるが、「取りに行く学びへ向かう」ための「学びに向かう集団作り」が重要であることに変わりはないと考え、北高校においても、「認め合い」「学び合い」「高め合う」協同学習を取り入れた授業づくりに取り組むこととした。

これからの時代に求められる教育のあり方として、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」の重要性が叫ばれて久しい。これらの「学び」を支える基盤としての「学びに向かう集団作り」を大切に、本研究を行うこととする。

2. 協同学習導入の経緯

前任校である松江市立女子高校は、ここ数年、学校改革の一環として、協同学習に取り組んできた。私自身も、初任者研修の頃から、諸先生方に指導していただきながら、協同学習を取り入れた授業を行ってきた。

前述のように、昨年度は教職経験6年目研修にあたり、「『認め合い』『学び合い』『高め合う』授業の研究～現代文の授業における『協同学習』の実践を通して～」というテーマに取り組んだ。その研究の大きな目標は以下の3点であった。

①【国語科の教科指導の観点から】

従来の一斉型授業に加え、協同学習を取り入れながら、学力差の大きなクラスの生徒全員が意欲的に学びに向かう授業を目指すこと。

②【クラス経営、人間関係づくりの観点から】

「認め合い」「学び合い」「高め合う」協同学習を授業に取り入れることで、生徒同士の人間関係づくりや学びにむかう集団作りを行うこと。

③【自己表現力育成の観点から】

進学や就職を控えた生徒が、個人面接や集団面接・集団討論、プレゼンテーション等でしっかりと自己表現できる力を身に付けるとともに、卒業後もしっかりと自分の考えを発信できる人となるよう、自己表現力を育成する授業を目指すこと。

教職経験6年研修を通して、改めて、協同学習は、多様な生徒が存在し学力差も大きい松江市立女子高校の実態に適した学習スタイルであることが分かった。また、学習指導という角度からだけでなく、クラス経営・人間育成という視点からも非常に有効な指導法であるということを実感するとともに、どの学校においても、協同学習は教育の基盤になるべきものだと考えるに至った。

3. 協同学習導入の根拠

従来の一斉型の授業スタイルは効率的である反面、教師による読解・解説が中心であり、生徒が自ら考え、疑問を持ち、解決しながら読み深めていく授業が展開しにくい。一般入試を想定して授業を進める進学校においては、教師主導の一斉型の授業が展開される傾向にある。しかし、この授業スタイルでは、知識の伝達という観点からは効率的であると言えるが、あくまでも教師から生徒への一方的な知識の伝達であり、「取りに行く学び」とはかけ離れている。

「取りに行く」のはあくまでも生徒個人であるが、学びのゴールを「自分だけができること」とするのではなく、「クラス全体ができること」とし、「認め合い」「学び合い」「高め合い」ながら、学ぶ集団として、クラス全体が「取りに行く」姿勢を大切にしたい。

協同学習は、「共に高まることを全員の目標とする」実践であり、誰もが「仲間を高めることに貢献する責任」と「仲間の援助に誠実に応える責任」を持つ活動である。そして、学習に向けて子どもたちを解放するために、「集団の持つ教育力」に働きかけることが重要だとされる。具体的には、自分なりの方法や考え方を学習に向けて発揮できる機会と環境

を用意すること、困っていることや解らないことを発言して聞いてもらえる仲間に育むこと、「支持的風土」に満たされみんなで課題解決に向かう態度を育むこと等が挙げられる(2015.6.11 岡山大学教師教育開発センター 高旗浩志先生 講義資料より)

単なる指導技法ではなく、教科指導・クラス経営の視点から、「取りに行く学びに向かう」生徒を育成できる教育理念が「協同学習」であり、本研究において協同学習に取り組む根拠である。

「自分の学びが、誰かの学びに貢献していること」を実感しながら「自他共栄」の精神を大切にする協同学習は、まさに、これからの時代を生きる生徒を育む教育の根底にあるべき考えではないかと考える。そして、この考えは、校種を問わず、すべての学校で行われる教育において、大切な視点であると考えている。

4. 育てたい生徒像

私自身は、大学で国際理解教育、日本語教育を専攻し、卒業後は、青年海外協力隊の日本語教師隊員として中国に派遣された経歴を持つ。自身の海外での経験や、その後、国際協力に携わってきた経験から、これからの未来を生きる生徒には、以下のような力を授業や日々の指導の中でつけていくことを意識したいと考えている。

『どんな状況におかれてもめげることなく、時には仲間の助けも借りながら、
周囲の人々と協力し、答えのない問題・課題に立ち向かえる力』

グローバル化や情報化等の変化が加速度的となる中で、将来の予測がますます難しい時代になることが想定されるこれからの時代に求められる力として、拠点校リーダー養成事業の説明会においては、以下の3つの課題が挙げられた。

- ・何が重要かを主体的に判断できること。
- ・対話や議論を通じて多様な人々と協働していくことができること。
- ・社会の中で自ら問いを立て、解決方法を模索し計画を実行し、問題解決に導き、新たな価値を創造し、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること。

(2016.7.21 教科リーダー養成・活用事業拠点校事業説明資料より)

以上のような、育てたい生徒像・求められる力をしっかり念頭におきながら、日々の実践を行うこととした。そして、目先の目標にとらわれすぎることなく、生徒の将来を見据えた力をつけていくことを大きな目標にし、本研究では、そのために必要と考える、以下のことに取り組んだ。

- ① 協同学習についての自分自身の学び直し。
- ② 生徒の実態把握、および、クラス内の人間関係づくり。
- ③ 松江北高校にあった協同学習の視点を取り入れた授業スタイルの模索。

①については、自分自身が改めて協同学習を学び直すために参加した研修報告として、「5. 外部研修報告」にまとめ、②③の内容については、「6. 北高校での取り組み」にまとめる。

5. 外部研修報告

本研究に取り組むにあたり、協同学習について、自分自身の学び直しが必要だと考え、日本協同教育学会が主催する以下の研修に参加させていただいた。それぞれの研修についての概要、特に印象深かった点について簡単に報告する。

〈I. 協同学習法ワークショップ（ベーシック）〉

日時：H28. 9. 17～18 会場：三重県四日市市じばさん三重

講師：日本協同教育学会理事 水野正朗 先生

このワークショップで学ぶ主な内容は、次の3つであり、協同学習を協同学習で学ぶようにデザインされている。

- ①協同学習の考え方と定義
- ②協同学習を用いた授業の留意点
- ③基本的な技法の手順と特長

・「協同」の意義

社会に出たら答えは一つではない。予想されない様々な課題に立ち向かうために、人と助け合って、知恵を絞りながら問題を解決していく。

・「自他共栄」の心

自分も高まり、周りのみんなも高まる。仲間とともに高まることを目標とする。

・「学び」のゴール = 協同学習の基盤

一人一人が自分で考え、他者と考えを統合しながら独自の解（＝納得解）に行きつくこと。自分としての答えをつかみとっていくこと。既にある答えをもらうことではない。

- ・多くの教師は、丁寧で分かりやすい説明と、理解の早い子どもの応答だけで授業をすすめる。⇒教師は、主役ではなく、ファシリテーター、あるいはコーディネーター

- ・子どもは他の子どもの意見を聞いて、「そんな考えもあるのか」と刺激を受ける。自らも発言することで、自分の頭が整理され、知識も定着する。

＝対話の重要性。アクティブラーニングの原点。学びの主役は生徒である。

- ・「深い」学び

情報化やグローバル化などの急激な社会変化の中でも未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることができる学校教育の充実。

[成果]

今まで、何となく分かっていたようで、漠然としていた協同学習の基本理念を学び直すことができた。特に、「自他共栄」の理念のもとに行うクラス経営についてのお話は、深く自分の腑に落ちるものであった。協同学習の具体的な技法についても学んだが、技法を使うための授業に陥ることのないよう、理念を大切に実践していきたいと感じた。

[課題]

協同学習は技法ではなく、あくまでも理念である。前任校でうまくいったやり方が他校ではうまくいかなかったりすることは当然ある。同じ学校でも、それぞれのクラスによって、生徒によって実態が異なるため、それぞれにベストなやり方がある。自分の目の前にいる、今向き合っている生徒に適した協同学習のあり方をしっかりとみつめ、研究していく必要がある。

〈Ⅱ. 協同学習法ワークショップ（アドバンス）〉

日時：H28. 11. 12～13 会場：愛知県名古屋市 南山大学

講師：日本協同教育学会理事 関田 一彦 先生

ベーシック講座を受講していることが、このアドバンス講座受講の条件となっている。ベーシックで学んだ「互恵的な協力関係」を学習活動に組み込む工夫と、自他の学びに対する個人の責任を明確にする方法を基盤とし、アドバンスでは、協同的な学習活動を支える協調の技能（グループ活用能力）の育成と自律的な学習者に必要な自己評価の力を伸ばす方法について学ぶ。また、アドバンスでは、その場限りの技法としての協同学習を脱して、授業方法論（考え方）としての協同学習について学ぶことを目的としている。

- ・状況が与えてくれる条件（欠席の生徒がいる等）を学習チャンスに変えるのが教師の役割。参加者、学習者とともに学びの場を作り上げていく。

・「この活動をしたら、こんないいことがある」という意味付けを学習者が自分でできることが大切。＝「やらされている」のではなく「やりたい！」

・協同教育（学習）の考え方

×助け合い

◎自立・自律した学習者を育てる

⇒他の人と力を合わせながら、自分の人生を自分の足で歩いていける学習者を育てる。

・「何のため」に学ぶのか？

今の教育では、一方的に与えてしまっている。＝「取りに行く学び」ではない。

⇒学習課題に取り組む目的の意義付けが大切。

自身のため → 仲間のため、大切な人のため → 社会のため、世界のため

・同じ目的に向かって力を合わせて取り組んでいく 「学びの共同体」

◎高まり合う、支え合う集団になっていくかが鍵

◎自立した学習者になるために真剣に学んでいける集団づくり

・学習目標のありかた

×常に誰かから目標を提示された頑張る

◎自分たちの学習目標を自分たちで立て、それをクリアするために必要なことを考えだせる力を育む。

・アクティブラーニングを使って、社会的に活用できる力をつけていく。

・アクティブラーニング型授業づくりのために

◎質の良い、生徒が右往左往する課題を提示する。

子どもたちに考えさせるための問いをしているか、常に自分に問いかける

・人間性の育成 =社会で生きていくため

[成果]

「協同学習とは、自立した学習者を育てること」というお話が腑に落ち、自分自身の教育観や育てたい生徒像にも影響を与えてくれるワークショップであった。目先のテストや模試、進学実績等に目が行き、大切な教育の本来の目的がおろそかにされがちな進学校においてこそ、このワークショップで学んだ協同学習の理念に基づく「人間性の育成」が大

切になってくるのだと思う。

[課題]

ワークショップの最後でもテーマとして挙げたが、協同学習の評価についてはまだまだ課題が残る。学びの過程をどのように評価していくのか、は今後の課題として引き続き考えていきたい。

6. 北高校での取り組み

対象クラス： 1年26R（普通科・早進度クラス）40名 ※担任クラス

対象授業： 国語総合「古典」（3単位）

クラスでの取り組み（担任として）：

- ・クラスメイトを知るための取り組みを日々の活動に取り入れる。
（日直が毎日終礼でスピーチを行う。日直日誌はクラスメイトに向けたメッセージや紹介したい新聞記事の紹介を中心とし、クラス掲示する等）
- ・人間関係を広げるため、一か月に一度、席替えを行う。

授業での取り組み・目指す授業スタイル：

・机を移動させての大がかりなグループ活動やジグソー法を多用する協同学習ではなく、日々の授業に常に取り入れることのできる、隣の席のクラスメイトとのペアワークを基本とした協同学習を行う。特別な場合以外は、隣と席を付けた形での授業。

・形にこだわったアクティブラーニングを目指すのではなく、生徒の頭がアクティブ状態になる授業をこころがける。

（例）教師主導の板書よりも生徒への発問を中心にした授業を展開する。

時には、生徒が板書計画をたて、説明を行う。

問いの答えを初めは一人で考え、隣の人と考え、最後は一人でまとめる。

・単なるペアワークではなく、「自分の学びが相手のためになる」という「自他共栄」の理念に基づき、お互いの学力向上を目指すペアワークを活動の中に必ず取り入れる。

（例）前回の授業の内容確認を必ずペアで行う。それぞれ相手の家庭教師になったつもりで、担当箇所の概要、ポイントを分かりやすく相手に伝えあう。

（例）ペア音読

（タイム設定をクリアするためにペアをサポート。自分で設定したレベル選びABC）

・ペアワークを中心に、「考えをまとめる力」「自分の意見を伝える力」「人の話を聞く力」「話し合いをする力」の向上を意識させ、活動を行う。

・単なる受験のための勉強ではなく、授業で扱う各教材から、登場人物の生き方や教訓を生徒が学び取り、生きる上での参考とできるような授業を心がける。教材を学ぶのではなく、教材で学ぶ授業を心がける。

・それぞれの教材についての生徒個人の感想や読み取りをクラス全体で共有し、さらに読みを深める活動を積極的に行う。教師の一方的な解釈を学ぶのではなく、クラスメイトの多様な読みから学ぶ。

・教材を最終的には自力で読み取る力を身に付けることを大きな目標とし、授業時にも教材をペアと協力しながら自分たちの力で読み取ることに重きをおいた授業を心がける。

協同学習を振り返っての生徒アンケート結果の集計 2017/2/15 実施 対象人数：39名

【1】協同学習・ペアワークを通して、自分の意見を仲間に伝えることができましたか。

結果 ㉔根拠を示してしっかり伝えることができた。(9名)【23%】
㉕しっかりと伝えることができた。(17名)【44%】
㉖伝えようと努力することができた。(13名)【33%】
㉗伝えようとしなかった。(0名)【0%】

【2】協同学習・ペアワークを通して、仲間の意見を聞くことができましたか。

結果 ㉔あいづちをしながら、しっかりと聞くことができた。(23名)【60%】
㉕しっかりと聞くことができた。(13名)【33%】
㉖聞こうと努力することができた。(3名)【7%】
㉗聞こうとしなかった。(0名)【0%】

【3】協同学習・ペアワークを通して、仲間との「学びあい」ができましたか。

結果 ㉔できた。(24名)【62%】 ㉕ほぼできた。(15名)【38%】
㉖あまりできなかった。(0名)【0%】 ㉗全くできなかった。(0名)【0%】

【4】協同学習・ペアワークを通して、クラス全体で「学びあい」ができましたか。

結果 ㉔できた。(20名)【51%】 ㉕ほぼできた。(18名)【46%】
㉖あまりできなかった。(0名)【0%】 ㉗全くできなかった。(0名)【0%】

以下の質問に対する解答

① そう思う。 ② ある程度そう思う。 ③ どちらともいえない。 ④ そう思わない。

【5】 ペアワークに取り組んでからどんなことが変わりましたか。

- ① 相手に説明することを意識して答えを考えるようになった。
① 16名【41%】 ② 17名【44%】 ③ 6名【15%】 ④ 0名【0%】
- ② クラスメイトとかかわるようになった。
① 22名【56%】 ② 14名【36%】 ③ 3名【8%】 ④ 0名【0%】
- ③ クラスの雰囲気が良くなった。
① 23名【59%】 ② 14名【36%】 ③ 2名【5%】 ④ 0名【0%】
- ④ 様々な考えがあることが分かった。
① 31名【79%】 ② 7名【18%】 ③ 0名【0%】 ④ 1名【3%】
- ⑤ 協力しながら学びあうことの大切さを知った。
① 17名【44%】 ② 19名【48%】 ③ 3名【8%】 ④ 0名【0%】
- ⑥ 以前よりも自分の意見が言えるようになった。
① 11名【28%】 ② 20名【51%】 ③ 8名【21%】 ④ 0名【0%】
- ⑦ クラスメイトの個性や良さに気が付いた。
① 28名【72%】 ② 11名【28%】 ③ 0名【0%】 ④ 0名【0%】

【6】 ペアワークに取り組んでどんな力がついたと思いますか。

- ① 学びあう力
① 19名【49%】 ② 18名【46%】 ③ 2名【5%】 ④ 0名【0%】
- ② 自分の意見を伝える力
① 25名【64%】 ② 12名【31%】 ③ 2名【5%】 ④ 0名【0%】
- ③ 人の話を聞く力
① 23名【59%】 ② 13名【33%】 ③ 3名【8%】 ④ 0名【0%】
- ④ 考えをまとめる力
① 20名【51%】 ② 14名【36%】 ③ 5名【13%】 ④ 0名【0%】
- ⑤ 話し合いをする力
① 25名【64%】 ② 12名【31%】 ③ 2名【5%】 ④ 0名【0%】
- ⑥ 根拠を探す力
① 14名【36%】 ② 20名【51%】 ③ 5名【13%】 ④ 0名【0%】
- ⑦ あきらめずに考える力
① 6名【16%】 ② 17名【45%】 ③ 15名【39%】 ④ 0名【0%】
- ⑧ 高めあう力
① 19名【49%】 ② 16名【41%】 ③ 4名【10%】 ④ 0名【0%】

アンケート【1】～【6】結果より

生徒には、日頃から、育てたい生徒像やクラス像、協同学習やペアワークを通して身に付けさせたい力など、こちらの思いを伝える場を多く持ったため、生徒は協同学習スタイルの授業に対して好意的、意欲的に取り組んでいた。その結果が【1】～【5】の結果に表れていると言える。

【6】については、①「学びあう力」、②「自分の意見を伝える力」、③「人の話を聞く力」、④「考えをまとめる力」、⑤「話し合いをする力」はペアワークを中心にした活動を通し、生徒一人一人が以前に比べて身につけられた力として実感しているようである。

⑥「根拠を探す力」については、自分の意見をペアに伝える際に、必ず、その根拠もあわせて伝えることをルールとしていたため、意識が高かったものと考えられる。

⑦「あきらめずに考える力」については、評価が分かれた。その理由として、「一人ではあきらめてそれ以上考えなかったであろう難しい問題も、クラスメイトと一緒に考えることであきらめなくなった」と回答する生徒がいる一方で、「ペアと二人で考えてみても分からないと、一人の時よりもむしろあきらめやすくなる。」とし、「ペアで分からなそうな難しい問題の場合は、グループワークにしてみると良いのではないか」と前向きな提案も見られた。

⑧「高めあう力」については、協同学習をすすめる中で、クラス内でも大きな変化が見られた。休み時間や放課後に、教室の前後の黒板を使って、生徒同士が一人では解けないハイレベル問題に取り組んだり、よりよい解き方をそれぞれが披露しあう場を持つたりする姿が多く見られるようになった。

以下、自由記述部分を紹介する。全員の生徒の記述をほぼそのままの形で記載する。

【7】自由記述

協同学習を取り入れた授業について

- ・ペアワークはとてもよい。もっともっとやってほしい。
- ・ペアワークをすると、授業の雰囲気があたたくなる気がするのでいいと思う。
- ・ペアと一緒に説明しあうと、自分が分かっていたところに気づくことができ、とても良い学びになります。
- ・相談すると、一人で考えるよりも自信がつくし、いろいろな考えがあって面白いと思うようになりました。
- ・ペアワークのお陰で話せるようになった人もいたので、授業以外でもクラスの仲を深めるのにとても良かった。
- ・クラスメイトと話すきっかけになることも多く、良かったと思う。
- ・クラスメイトのいろいろな考えを知ることができて良かったです。

- ・登場人物の心情を考えたり、なかなか言いにくいようなことでも、友達に伝えたり、少しアイデアをもらってそれを改善することで自分の意見に自信を持つことができるので、楽しくなります。
- ・気になっている人と隣だったりすると楽しくて、ペアワークを通して一緒に考えると相手のことが少し分かった気がして良かったです。
- ・楽しくてやりがいがあると思う。
- ・自分が「絶対にこうだろう」と思っていたことが、ペアの人と違ったり、自分の意見が全く違ったりと、いろいろと気づくことがあって良かったです。
- ・ペアの人の意見を聞き、自分の考えと全く違うこともあり、とてもためになりました。ペアワークが楽しすぎました。
- ・一人だとたぶん考えなかったであろう質問も、ペアだから深く考えることができ、またしっかり考えるので、記憶にも残りやすかったです。隣の人と話すことで意見をいいやすくなりました。
- ・とても良いと思います。眠くならないし、ペアと話すことで意見や考え方の共有ができ、より深く読み込むことができます。
- ・いろいろな考えがあって、それを共有できるのがとても面白かった。
- ・一人で考えると不安な場合も、ペアで相談してからだとある程度自信を持って発表することができる。
- ・中学校までは、一人一人個人で学習するスタイルが多かったが、高校になってペアでやると、相談して疑問を解決することができたりしてとても良いと思う。
- ・一人一人が作品の感想を書き、他の人の感想をクラスで共有したりするのは、少し面倒だが、理解が深まる。
- ・ペアの人の意見が聞いて学び合いができて良かったが、ペアと二人では分からないこともあるので、時々グループでやってみるのも良いと思う。
- ・ペアワークは、楽しくてやる気ができます。
- ・クラスメイトの性格や意外な一面が分かった。
- ・ペアワークをやって、古典をさらにうまく読む力が身に着いた気がする。
- ・人と話すと人がどんな考えを持っているのかわかり、人の心情を読み取る力も身につくので、現代文のテストや実社会でも役に立つと思った。
- ・一人だと思いつかなかったことが出てくる。考えを深めることができる。
- ・クラスメイトの個性に気づけて、普段話さない人とも話すきっかけになった。
- ・分からないところも、ペアの人と補いあいながら答えを導きだすことができるところがとても良かった。
- ・一人ではなく、数人で考えることにより、いろいろな意見を聞くことができ、より理解が深まると思います。
- ・様々な意見を聞き、出し合うことにより、より意見が深まる。

・ペアワークはすごくいいと思います。普段話さない人とも話したりしていいです。理解も深まりました。

・今までやったことがなかったので、最初のほうはなかなか慣れずに大変だったけれど、今となっては楽しい時間になりました。来年もこの形であってほしいと思います。

・考えを交換したり、ペアで音読したりするのは楽しいです。普段話さない人とも話せて幸せです。

・ペアワークで内容が深まりました。

・自分とは違う、いい意見も聞けて、考え方が広がっていい。

・自分の意見を伝えようと努力する力が身につきました。

・自分の分からないことを教えてもらったり、二人で考えて答えを出したり、いろいろな力を楽しく身に付けることができました。

・ペアの二人だけでなく、四人グループでもいいと思う。

・相手に伝わるように説明するのは大変なことだと思った。

・人の意見を聞けて学びあえた。

・ペアワークは中学校ではあまりなかったので、初めは大変に感じたけれど、意見を伝える力が前より身についたと思います。

・ペアワークでたくさんの人とかかわることができた良かった。

・相手に伝える力が一番身についた。これからもペアワークで学んでいきたいので是非やってほしい。

・意見は同じでも、その言い回しや例え方で個性がでる。

・寝なくなる。

・難しい文章をじっくり考えて、いろいろな解釈を考えるのが楽しかったです。その文章だけでなく、その背景などを想像することで学びが深まった気がします。

・人の意見を聞けることに感謝。仲間がいることに感謝。話しているうちに仲が良くなるだけでなく、自分の意見を主張する練習になるのはもちろん、相手の意見を聞き、尊重することの良さもしっかりと感ずることおでき、さらにお互いが分からない時は協力することの良さも感ずることができるから素晴らしい。

・いろいろな人と話すことができて良かった。いろんなことを教えてもらい、勉強になった。

・ペアワークは仲の良い人たちとはたくさんの意見が出てペアワークの大切さに気付くことができるが、あまりお互いを知らない人や進んで話合いができるような雰囲気がないグループになると、ただただ辛かった。

・隣の人にもよりますが、だいたい良かったです。少しペアワークが多すぎる気がします。

・ペアの二人ですてダメだとむしろ一人で考えるよりもあきらめやすくなる。

古典の授業で学んだこと

- ・人の生き方。
- ・昔の人の考え方やいろいろな教訓。
- ・古典を学ぶ意味。
- ・昔の人の思想、時代の違い、学ぶことの大切さ。
- ・昔も今も変わらない世の常があるということ。
- ・古い人たちの考え、年上の人や親を敬うこと。
- ・読解の力がつき、内容を読み取れるようになったら、読書のように古典を楽しむことができるだろうという面白さ。
- ・古き良きこと。温故知新の大切さ。
- ・古人の考え。「生き方」「死に方」
- ・さまざまな教訓。
- ・昔の人の生き方。中国文化。ペアワークの楽しさ。
- ・ものの見方がいろいろあること。
- ・論理の展開。昔の人の考え方。
- ・今と昔の考え方の違い。
- ・人生の教訓。
- ・人生の生き方、考え方。
- ・今の時代にも必要な心得。
- ・過去のことについて学んで、新しいことを知ると新たな発見があること。
- ・古いことから学べることもある。
- ・昔の人々の思い。
- ・昔の人の考え。
- ・人生観。
- ・世の中の無常さ、世の不平等さ。
- ・先人の生き方、考え方。
- ・ホテル生き方。
- ・さまざまな教訓。
- ・ペアで協力して考えること。
- ・古典の読み取り、人生の教訓。
- ・故事成語の誕生秘話。

7. 自己効力測定尺度調査について

対象クラスで自己効力測定尺度調査を実施した。(第1回：7月。第2回：2月) この調査では、様々な観点から生徒の自己効力を測定している。今回は、その中でも、協同学習

との関連が深いと思われる「社会的関係性」に関する質問項目に注目して考えてみる。

「社会的関係性」の分析項目の中には、「教える役割」「周囲の期待」「身近な友人」についての観点がある。それぞれの項目ごとに以下のような具体的な質問項目があり、生徒は、「いつもそう思う」「時々そう思う」「少し違う」「絶対違う」の4つの選択肢で回答する。

「教える役割」:

- ① 私は、勉強のことで、友だちに質問されたり相談されたりすることがあります。
- ② 私は、友達に勉強で分からないところを教えてあげることができます。
- ③ 友達が、勉強が分からないとき、私は教えてあげることがあります。

「周囲の期待」:

- ④ 省略
- ⑤ 省略
- ⑥ 「友達が勉強しているとき、私に期待していると思います。」

「身近な友人」:

- ⑦ 私には、勉強が分からないとき、気軽に聞ける友だちがいます。
- ⑧ 私には、試験の前に、一緒に勉強する友だちがいます。
- ⑨ 勉強が分からないとき、私には気軽に教えてくれる友だちがいます。

上記の全ての項目において、「いつもそう思う」「時々そう思う」が大半をしめる結果であった。特に、①の項目について、「いつもそう思う」「時々そう思う」と回答した生徒の割合は、1回目よりも2.5%上昇し、72.0%となっている。また、⑥については、「いつもそう思う」「時々そう思う」と答えた生徒の割合が、35.0%から45.0%に増え(10%増)、⑨についても、85.0%から92.5%に伸びている。

もともと、「教える役割」「周囲の期待」「身近な友人」の項目に対する「いつもそう思う」「時々思う」という回答が高いクラスであるが、協同学習の取り組みを通して、良い意味で「友達からの期待」を感じながら、学習に励み、分からないところを教え合ってきたことを示す結果と言えるのだろう。

8. まとめ

リーダー教員養成事業のセンター研修の中で、研修講師の島根大学の千代西尾先生から次のように問われた。「皆さんは、生徒に対し、将来、彼らが就職活動の際に、人工知能と競い合って、勝ち残ることができる力を持った人間に育つような教育をしているか。」同時に、「教師も人工知能にとって代わられることが十分あり得る時代」が来るともお話しされ

た。

多くの仕事が人工知能にとって代わると推測されているこれからの時代において、どんな生徒を育て、教師がどのような役割を担っていくべきなのかを根底から問われた感があった。人工知能を賢く使いこなし、役割分担をしながら、よりよい教育現場のあるべき形を探っていくことも今後私たちに課せられる使命なのかもしれない。千代西尾先生は、お話の中で、本来人間が考えるべきこととして、「本当に賢くなるにはどうしたらいいのだろうか」というお題を挙げられていた。

上記のどの問いかけも、現在の私に即答できるものではない。しかし、新たな時代を生きていく生徒に対し、日々の学校生活を通して、どんな力をつけさせ、どんな人間に育ててほしいと願うか、ということを今後常に大切な視点として考えていきたいと強く感じた一年間の研修であった。

そして、人工知能と共生・共存することが求められる時代だからこそ、人間として私たちは、一人一人の強みや個性を生かし、協力しあい、困難を乗り越えていくことがますます重要になってくるのではないか。そんな時代を生き抜く力をつけていくために、「認め合い」「学び合い」「高め合う」力の育成を目指す協同学習はやはり大切なのだと思う。答えを自分なりに模索しながら、今後も、自分の目の前にいる生徒一人一人を見つめ、よりよいあり方を考えていきたい。

9. 活動報告

日 程	内 容	会 場
6月28日(火)	リーダー教員センター研修会Ⅰ	島根県教育センター
7月 8日(金)	松江北高校リーダー教員・管理職会	松江北高等学校
7月20日(水)	年間計画書 提出	
7月21日(木)	拠点校リーダー教員公開授業	松江北高等学校
9月12～13日	リーダー教員センター研修会Ⅱ	島根県教育センター
9月17～18日	日本協同教育学会ワークショップ〈ベーシック講座〉	三重県四日市市 じばさん三重
11月11～13日	日本協同教育学会ワークショップ〈アドバンス講座〉	愛知県名古屋市 南山大学
11月16日(水)	リーダー教員中間報告会・公開授業	松江北高等学校
11月17日(木)	アクティブラーニング研修会(実践報告)	島根県教育センター
2月15日(水)	自己効力尺度測定調査・アンケート実施	松江北高等学校
3月中旬	研修成果報告書 提出	